

# 両替商

— 貨幣・商品流通を支えた商人 —



【浪花名所図絵・順慶町夜見世之図】歌川広重  
大坂順慶町の夜店が立ち並ぶ風景の左奥に「銭小うり」の看板がみえる。人が往来する町にはこのような小銭の両替商がみられた。

## おかね今昔物語

「使う」「貯める」…それだけではありません  
おかねは「昔」の暮らしのありよう  
それを「今」に伝える物語です



### 【両替商の天秤・分銅】

重さを計って使う銀貨が使われていたため、天秤と分銅は両替商にとって不可欠だった。分銅は大判座の後藤家が製作したものに限られた。

### 【振手形】

大坂の町人丹波屋徳兵衛が船(明神丸)への支払いを両替商(播磨屋忠兵衛)に対して依頼した手形。



江戸時代には、全国で通用する金銀銭貨のほか、特定の地域で使われた藩札など、さまざまな貨幣が流通し、その交換比率も日々変動しました。地域によって主として使われる貨幣が異なっていたことから、地域をまたいで活動する人々が貨幣を使うために、両替が必要でした。

両替商は、異なる種類の貨幣の交換だけでなく、遠隔地間で商人同士が資金のやりとりをする際に、現金輸送に代えて為替による取引も行いました。また、諸藩の大名が、領民から受け取った年貢米が換金されるまでの間、日常の消費の支払いのための資金を必要とする場合に貸出を行っていました。さらに大坂の町人たちは両替商に金を預け、それを担保に「振手形」を発行し、現金のかわりに支払いに使っていました。

このように大坂を始めとする大都市の両替商は、自らの信用に基づき、今日の銀行と同じようなさまざまなサービスを提供し、貨幣の流通だけでなく、江戸時代の活発な商品流通を支えていました。

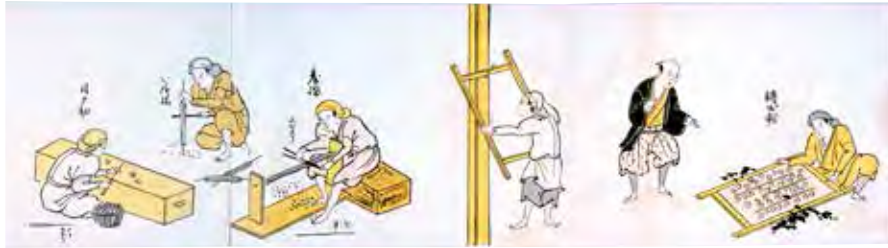
また両替以外の商売を兼ねる両替商も多くみられました。全国の城下町や宿場町などにも両替商がで、その多くは、商人・宿屋などが兼営したものでした。



〈日本銀行金融研究所貨幣博物館〉

東京都中央区日本橋本石町 1-3-1  
<http://www.imes.boj.or.jp/cm/>

# 銭貨の形とつくりかた



【鑄銭図解】

現在の宮城県石巻市にあった銭座で寛永通宝をつくる様子を描いた絵巻物。一枚ずつ切り取った銭貨の中央の穴を四角く整え、四角い棒を通して周りを削り円形に整えている。



(表)



(裏)

【寛永通宝 銅銭】

円形で四角い穴があいた形状は日本の古代に発行された富本銭や和同開珎から変わらない。

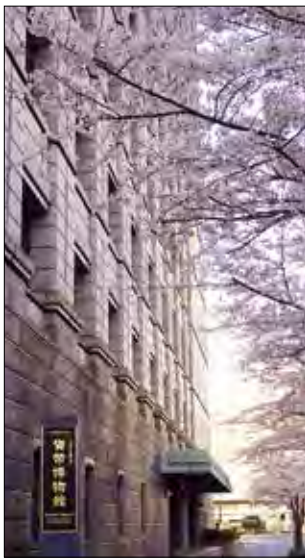
【文久永宝 枝銭】

表裏二枚一組の鑄型に溶かした金属を流し込み、冷えて固まった後に取り出したもの。金属の流れた道が枝のように見え、先に銭貨ができています。



おかね今昔物語

「使う」「貯める」…それだけではありません  
おかねは「昔」の暮らしのありよう  
それを「今」に伝える物語です



〈日本銀行金融研究所貨幣博物館〉

東京都中央区日本橋本石町 1-3-1  
<http://www.imes.boj.or.jp/cm/>

日本では、7世紀末に律令国家が銭貨を製造・発行してから、19世紀後半に明治政府が西洋式貨幣の製造法を導入するまでの約1200年間、丸くて中央に四角い穴があいた形の銭貨が使われていました。この形の銭貨がはじめてつくられたのは、紀元前3世紀の中国と考えられています。中国の資料には、銭貨の形は、円形(丸)は天、方形(四角)は地を表していたことが記され、こうした中国の制度を取り入れた日本や東アジア諸国も同じ形の銭貨を使うようになりました。

江戸幕府は、寛永通宝などの銭貨をつくるため、様々な技術を持つ専門家を集め、全国に銭座をつくりました。『鑄銭図解』には、銭貨をつくる様子が描かれています。金属を流し込む鑄型をつくるため、砂の表面に銭貨を並べ、その上からも一方の型を押しつけ、形を写しとり鑄型をつくります。鑄型に金属を流し、枝状になっている銭貨を取り出して、中央の穴に四角い棒を通し、はみ出した銭貨の周りの金属を削りました。つまり、銭貨の中央にある四角い穴は、縁を磨く際に銭貨が回転しないよう固定でき、都合が良かったといえます。この銭貨のつくりかたは古代から基本的に変わらなかったと考えられています。

# 小額の貨幣の普及



【明和南鐐二朱銀】1772年発行  
「南鐐」とは良質の銀貨を意味する。「8枚をもって小判1両に換える」との文言が記載されている計数銀貨。



【<sup>つば</sup>鐐型貨幣入れ】  
刀の鐐の中に二分金などを入れられるようにつくりされている。



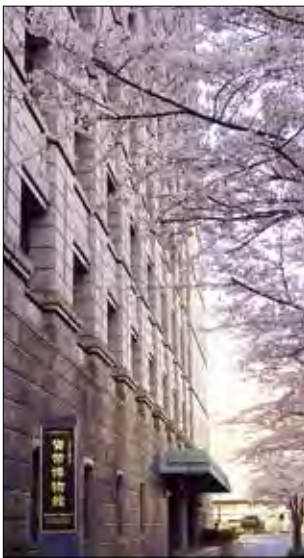
【<sup>わきざし</sup>脇差型貨幣入れ】  
外観は脇差(小刀)で、小型の金銀貨などが入れられるように工夫されている。

## おかね今昔物語

「使う」「貯める」…それだけではありません  
おかねは「昔」の暮らしのありよう  
それを「今」に伝える物語です

江戸時代には、商品取引が盛んになり、人々が貨幣を使う機会が増え、特に小さい額面の貨幣へのニーズが高まってきました。幕府が製造した金貨・銀貨・銭貨のうち、日々の支払いには主に銭貨が使われましたが、江戸時代の中頃からは1両の8分の1の2朱やその半分(1両の16分の1)の1朱といった、比較的小額面の金貨や銀貨も多く使われるようになりました。幕府が発行した貨幣総額に占める小額の貨幣の割合は、時代が下るほど増大しました。

幕府は、江戸時代初めには重さを計って使うひょうりょう秤量貨幣であった銀貨を、小額取引に便利な計数貨幣で発行するようになり、1772年には計数銀貨である二朱銀を発行しました。これは金貨の補助貨幣として発行された銀貨でした。農業における商品生産が広がり、経済的なゆとりを持つ人が増えてくると、寺社参詣や物見遊山など名所旧跡を巡る旅が人々の間で盛んになりました。旅に出るときに全ての貨幣を銭貨で持つと重くてかさばるため、人々は二朱銀のような小額の金銀貨を少しずつ銭貨に両替しながら、わらじの代金や宿代などを支払いました。金銀貨を持ち歩く際には、盗難や強盗に遭うのを避けるため、見た目は脇差などの形をした貨幣入れが用いられることもありました。



〈日本銀行金融研究所貨幣博物館〉  
東京都中央区日本橋本石町 1-3-1  
<http://www.imes.boj.or.jp/cm/>

# 江戸時代の旅と貨幣

【成田山参詣小金原之図】

1855（安政2）年  
歌川国貞2代（1823～1880年）  
成田山新勝寺（千葉県）へ向かう  
旅人（左端）の持つ銭さしから銭  
が落ちている場面。19世紀に入  
ると、江戸から3泊4日での成田  
山参詣の旅が盛んとなった。



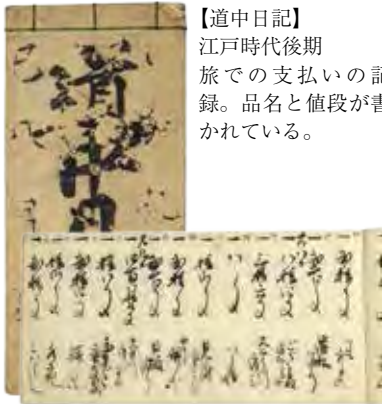
おかね今昔物語

「使う」「貯める」…それだけではありません  
おかねは「昔」の暮らしのありよう  
それを「今」に伝える物語です



【五十三次内 程かや】1854（安政元）年  
中央に銭さしが描かれている。「弥二」「喜太八」の名前があり、程ヶ谷の場面として描かれているが、『東海道中膝栗毛』では追分（三重県四日市市）の場面。「盗人に追分なれやまんぢうのあんのほかなる初尾（初穂）とられて」  
弥次は茶屋で、金比羅参りの格好をした「手品つかひ」に一杯食わされ、まんじゅうの大食い競争となり、金比羅様への初穂料300文とまんじゅう代233文を払うことになる。

【道中日記】  
江戸時代後期  
旅での支払いの記  
録。品名と値段が書  
かれている。

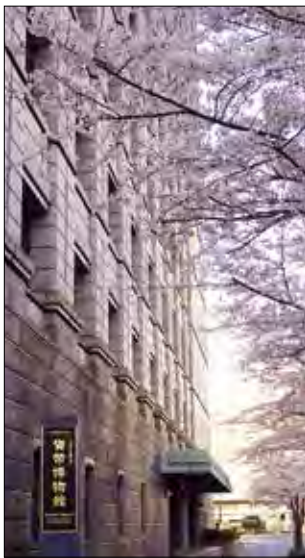


江戸時代後期には、寺社参詣や名所を巡る旅が人々の間で盛んになりました。交通や宿泊の便が良くなり、名所図会などのガイドブックも多く出版されるようになります。

「道中日記」などの江戸時代の旅人の記録をみると、道中の名産品を食べ歩きながら、伊勢参りへ向かった様子が読み取れます。

東海道を旅したある記録には、道中の飲食代として「みたらし20文」「もち13文」「酒90文」、旅の身支度として「わらじ12文」、交通費として「大井川渡し489文」、宿泊費として「浜松泊り200文」などの支払いが見られます。このほか安倍川餅を食べたり、熱田神宮で賽銭を投げたりと、旅を楽しんでいる様子が窺えます。

また旅の指南書には、「心付け（チップ）を二、三文多く払えば、旅はスムーズに進む」と、現代にも通じる旅の心得が書かれています。弥次さん、喜多さんでおなじみの『東海道中膝栗毛』にも、心付けを支払う場面があります。安倍川の渡しで、人足と料金交渉をして、肩車で1人64文と決まります。前日の雨で水勢が強く、渡り終わって安堵し、64文の他に心付けを16文ずつ渡しました。『東海道中膝栗毛』には、お金にまつわる場面が度々出てきます。



〈日本銀行金融研究所貨幣博物館〉

東京都中央区日本橋本石町 1-3-1  
<http://www.imes.boj.or.jp/cm/>

# 江戸時代の宝くじ — 富くじ —



【浪花福富舞臺図絵】柳斎重春 (1802～1852年)  
大坂での富突興業 (抽選会) の様子を描いた錦絵。一番右には抽選用の木の箱が置かれ、中央の絵の舞台前方の人が左手に持っている錐の先には当選番号の木札が描かれている。



【熊本藤崎社千両富場之図】  
藤崎八幡宮 (現熊本県) での富突興業の様子を描いた錦絵。



【富札】 湯島天神 (左)、(割札) 谷中感応寺 (右)  
右は、本郷の富札屋が1枚の富札を元に発行した谷中感応寺十人割の割札。谷中感応寺、目黒瀧泉寺、湯島天神は「江戸三富」と呼ばれ、富突が行われる場所として有名であった。

## おかね今昔物語

「使う」「貯める」…それだけではありません  
おかねは「昔」の暮らしのありよう  
それを「今」に伝える物語です

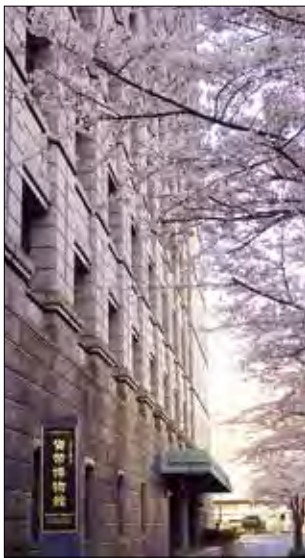
江戸時代には、現在の宝くじと同じように、番号入りの札「富札」を販売し、抽選を行い、当選者に賞金を支払うくじがあり、「富」「富突」「富くじ」などと呼ばれました。

幕府は、賭博の側面が強いとして、富くじを統制しました。しかし、幕府が財政難になる中で、寺社の建物の修繕費への補助を削減するため、寺社に富くじを許可するようになり。それらは江戸・大坂・京都を中心に行われ、「御免富」と呼ばれました。

江戸の富くじは19世紀前半に全盛期を迎え、年間120回におよびました。3日に1回の割合で江戸市中のどこかで抽選会(富突興業)が行われていたことになりました。

境内などで行われた富くじの抽選会には、攫千金を夢見て多くの人が集まりました。最高賞は100両程度のことが多かったようです。抽選会では、番号の書かれた木札を箱に入れ、箱の穴から錐で木札を突いて当たりの番号を決め、当たりの富札を持つた人に賞金を支払いました。

実際には、富札は1枚金2朱(1両の8分の1)など、庶民には高価なものでした。そのため、庶民は、富札屋から1枚の富札の権利を分割して買いやすくした「四人割」「十人割」などの割札を購入し、想いを札に託しました。



〈日本銀行金融研究所貨幣博物館〉  
東京都中央区日本橋本石町 1-3-1  
<http://www.imes.boj.or.jp/cm/>

# 儀礼の場面で

# 使われる貨幣



【役者絵 尾上松助 和田しづま】19世紀前半敵討に向かう和田しづまに、主君誉田内記が饒別の小判包みを与える場面。



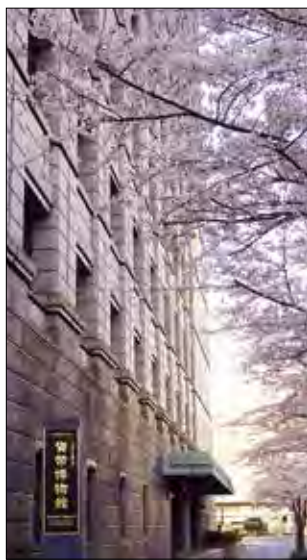
【包銀】丁銀を包んだもの。



【包金】小判50枚を包んだもの。

## おかね今昔物語

「使う」「貯める」…それだけではありません  
おかねは「昔」の暮らしのありよう  
それを「今」に伝える物語です



〈日本銀行金融研究所貨幣博物館〉

東京都中央区日本橋本石町 1-3-1  
<http://www.imes.boj.or.jp/cm/>

貨幣は昔も今も、経済取引だけでなく献上、祝儀、饒別といった贈答・儀礼の場面でも使われてきました。日本では、貨幣が儀礼で使われる際、和紙に包まれることが多く、現在でも冠婚葬祭の場でその名残をみることができます。砂金は古代から和紙などに包み、贈られました。その後江戸時代に入り、小判や二分金など重さや形が定められた金貨が発行されるようになると、幕府へ金貨を納める（上納）際には、金貨を和紙で包み、金座役人の後藤家が表書きと封印をした包金を使用しました。

丁銀や豆板銀などの銀貨は毎回重さを量って使う貨幣で、そのまま使うには不便でした。そのため、銀貨を和紙で包んだ包銀が上納だけでなく贈答や取引の場面で用いられました。一定の重さの銀貨を包み、銀座の役人などが「銀五百目」「銀一枚」などと表書と封印をしました。単位「枚」は銀貨の枚数ではなく、重さの単位（1枚＝43匁、161グラム）で、贈答の場面で好まれて使われました。

現代でも、金融機関が封をした札束が用いられることがあります。包金銀についても封印は両替屋が行うこともあり、その信用力が高いため通常は封印されたまま授受されました。

# 富への願いと福の神



【七福神宝の入船】歌川広重(三代)



【二福神あそび図 四海波】池田英泉



【藩札(大黒・えびす)】



【藩札(大黒)】



【豆板銀(大黒)】

おかね今昔物語

「使う」「貯める」…それだけではありません  
おかねは「昔」の暮らしのありよう  
それを「今」に伝える物語です

日本では古くから、幸福や商売繁盛を願い種々の神に祈る風習がありました。大黒や恵比寿などの七福神信仰は、日本古来の信仰と海外の宗教が合わさったものです。特に、豊作・豊漁や商売の神とされた大黒と恵比寿は縁起物として掛け軸に描かれるなど、広く親しまれました。

江戸時代後期、錦絵が広く普及すると、富の象徴として小判などの金貨や千両箱、米俵などと共に七福神を描いた錦絵が多く刷られました。七福神や財宝を乗せた宝船を描いた絵を正月に枕の下に敷いて寝ると、良い初夢をみられると信じられ、宝船を描いた錦絵を売り歩く宝船売りは正月の江戸の風物詩でした。

大黒などの福の神は貨幣そのもののデザインにも使われてきました。江戸幕府から銀座の経営を任せられた湯浅氏は、徳川氏から「大黒」の姓を与えられ、彼のつくった丁銀や豆板銀には、「大黒」の姿の極印を打ったものが多く見られます。また江戸時代に各藩が発行した紙幣にも、大黒や恵比寿などの福の神がデザインされました。

さらに、明治時代にはいと国立銀行券の裏面には恵比寿が描かれました。また最初の日本銀行券にはすべての券種に大黒がデザインされ「大黒札」と呼ばれました。



〈日本銀行金融研究所貨幣博物館〉

東京都中央区日本橋本石町 1-3-1  
<http://www.imes.boj.or.jp/cm/>

# 財布と貯金箱



【役者絵】  
紙入から小判を出す様子。



【紙入(鼻紙差し)】  
紙入は、鼻紙や葉などを持ち歩くための布や革製の袋だが、財布としても使われた。



【胴乱】  
腰に提げ、銭や薬などを入れた袋。もとは鉄砲の弾丸入れとして用いられた。



【動物や宝珠をかたどった陶製の貯金箱】

## おかね今昔物語

「使う」「貯める」…それだけではありません  
おかねは「昔」の暮らしのありよう  
それを「今」に伝える物語です

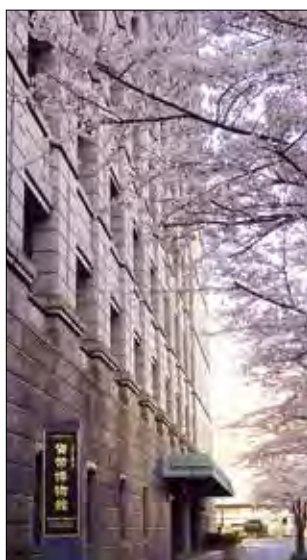
人々は昔から、お金を巾着袋などの財布に入れて持ち歩き、また壺や箱などに入れて貯めてきました。

江戸時代に入り、金貨・銀貨・銭貨とともに藩札などの紙幣が流通するようになると、それまで使われてきた巾着袋のほか、鼻紙などを入れる懐中用の袋である「紙入」が財布として使われるようになりました。明治時代には、新たに発行されたお金の形に合わせた財布や海外から輸入されたパーツを使って作られた「がまぐち」が登場しました。

人々は、その時々々の流行を取り入れながら、錦やビロードなどの高級織物のほか、藤や革といった様々な素材から作られた財布を使用しました。財布の中には、金具などに工夫をこらしたものもありました。

お金を貯めるための貯金箱は、明治時代に貯蓄の習慣とともに広がっていきました。初期の貯金箱は陶製の郷土人形にお金を入れる口をつけた簡単なものですが、時代を経るにつれて形や素材が多様化していきました。

郷土人形・玩具などの流れをくむ動物の貯金箱や、銀行などが宣伝を兼ねて顧客に配布した貯金箱などをみると、その時々々の世相や人々の好みが見えわたることがわかります。



〈日本銀行金融研究所貨幣博物館〉

東京都中央区日本橋本石町 1-3-1  
<http://www.imes.boj.or.jp/cm/>





【樹上商易諸物引下図】1865年 歌川広重 三代  
人々が値上がりした商品を木の上から引きずりおろそうとしている。一番左の絵には魚や野菜、真ん中の絵には日本酒の酒樽、一番右の絵には米俵や日本茶の缶などが描かれている。

# 開港と物価の高騰

「使う」「貯める」…それだけではありません  
おかねは「昔」の暮らしのありよう  
それを「今」に伝える物語です



【洋銀改三分定】1859年  
アメリカの意向もあって、海外から流入した洋銀に「銀三分」として国内で通用することを示す極印を打ち、通用を認めたもの。結果的にはあまり流通しなかった。



【万延小判(左)天保小判(右)】  
万延の改鑄(1860年)で、金貨の重さを1/3とすることで、国内金銀比価はようやく国際水準になり、金貨の流出は収束に向かった。



1858年、日本はアメリカなど5カ国と通商条約を結び、その翌年に横浜・長崎・箱館が開港して各国との本格的な貿易が始まりました。生糸やお茶などが海外に輸出される一方で、武器、織物など様々な製品が輸入されるようになりました。開港直後には、輸出品の値段が高騰し、また国内と海外で金銀の交換比率が異なっていたことから、海外に比べ割安な金貨が海外へ流出しました。外国商人は4枚の洋銀(メキシコ銀)を日本で小判1枚に交換し海外へ持ち出せば、洋銀12枚を得ることができたのです。

江戸幕府は金貨の流出を防ぐようと1859年の開港日前日に、金銀の交換比率を海外に近づけた安政二朱銀を発行しました。しかしアメリカなどから激しく反対を受け、間もなく通用停止となりました。

1860年、幕府は海外との金銀比価を調整した金貨を発行し、ようやく流出は止まりました。しかし幕末の内戦の中で、含まれる金の量を減らした金貨を幕府が大量に発行して財政赤字を賄ったことなどから、激しいインフレが起りました。当時の貨幣を巡る混乱や物価上昇については、庶民の目から見た錦絵で風刺されましたが、この後、江戸幕府の貨幣制度は崩壊に向かうこととなります。



〈日本銀行金融研究所貨幣博物館〉  
東京都中央区日本橋本石町 1-3-1  
<http://www.imes.boj.or.jp/cm/>



【浪花名所之内川崎造幣局】長谷川貞信(二代)

# 「円」の誕生

「使う」「貯める」…それだけではありません  
おかねは「昔」の暮らしのありよう  
それを「今」に伝える物語です



【明治新貨幣と両替屋】



【新額面の大藏省印を押した藩札】



【1円金貨】1871年発行



【新紙幣 明治通宝札】  
1872年発行



〈日本銀行金融研究所貨幣博物館〉

東京都中央区日本橋本石町 1-3-1  
<http://www.imes.boj.or.jp/cm/>

明治維新直後には、江戸幕府が発行した貨幣、各藩が発行した藩札、明治政府が発行した「両」単位の紙幣や金銀貨など、様ざまなお金が使われていました。社会の混乱が続くなかで、明治政府や藩などが増発した紙幣の価値は下がり、貨幣の偽造が横行するなど、貨幣の流通も混乱しました。

明治政府は、1871年の新貨条例により金貨本位制（金1・5g≒1円）を採用し、全国一律の貨幣単位「1円≒100銭≒1千厘」が誕生します。政府はこれに基づき、西洋式製法による金・銀・銅の新貨幣と、「大藏省兌換証券」などの政府紙幣を発行しました。当初の政府紙幣は江戸時代に発行されていた藩札の形式と同じ縦型でした。

政府は、江戸幕府が発行した金銀銭貨や各藩が発行した藩札、政府自身が発行した「両」建ての紙幣などを回収し種類ごとに交換レートを定めて円単位の貨幣と引き換えました。低い額面の補助貨幣の製造が遅れたため、江戸時代の貨幣単位の藩札に、各藩札の交換レートに基づいた新単位の銭・厘の額面の印を押して流通させました。一方で新しい貨幣が普及するには時間がかかり、「円」が誕生した後しばらくの間、江戸時代に発行された貨幣も使われました。

# 民間銀行の広がり 内戦による紙幣価値の下落



【欲の戯ちから競】1880年  
役人の服を着た紙幣が米俵に引きずられ、紙幣価値の下落と物価の高騰を示している。  
明治政府が発行した金銀貨が洋服を着て紙幣を支えている。

## おかね今昔物語

「使う」「貯める」…それだけではありません  
おかねは「昔」の暮らしのありよう  
それを「今」に伝える物語です



【政府紙幣】  
神功皇后札



【国立銀行紙幣】



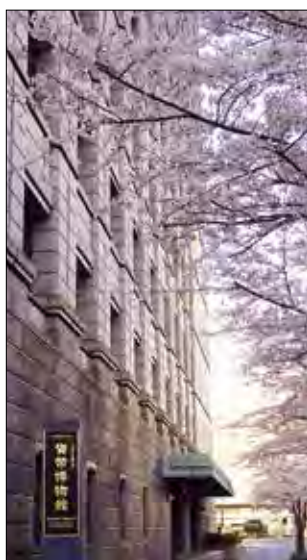
【西郷札】

幕末開港により海外との貿易が大幅に拡大し、国内の産業も盛んになりました。これを金融面で支えるため、欧米をモデルにした民間銀行が各地に設立されました。

このうちアメリカのナショナル・バンク制度をモデルとした民間の銀行「国立銀行」には、紙幣の発行が認められ、最終的に153行が設立されました。新設銀行の経営には、欧米の制度や技術が導入されるとともに、江戸時代から金融や貨幣発行に携わってきた両替屋や各藩出身者のノウハウが活用されました。

1877(明治10)年に明治政府の方針に反対する旧薩摩藩士族の一部が西南戦争を起しました。政府は政府紙幣の発行や国立銀行からの借り入れにより戦費を調達しました。そのため紙幣価値が下落し物価は高騰しました。また旧薩摩藩士族は戦費調達のために「西郷札」を発行しました。

1881(明治14)年に大蔵卿(現在の財務大臣)に就任した松方正義は、財政支出を賄うための不換紙幣の増発が紙幣価値下落の原因であると考えました。そこで、松方正義は、増税や官業払い下げによる緊縮財政と、増発された紙幣の回収を進め、紙幣価値の回復を図りました。



〈日本銀行金融研究所貨幣博物館〉

東京都中央区日本橋本石町 1-3-1  
<http://www.imes.boj.or.jp/cm/>

# 日本銀行の誕生と

## 日本銀行券の発行



【永代橋際日本銀行の雪】1882年  
永代橋際にあったレンガ造りの建物を仮店舗として開業した。



【最初の日本銀行券「大黒札」】

1882(明治15)年、各地にあった民間銀行をひとつのネットワークとして結びつける機関として日本銀行が設立されました。当初、永代橋際にあった建物を仮店舗として開業し、現在の日本橋に本店が移ったのは辰野金吾設計による建物が竣工した1896(明治29)年のことです。

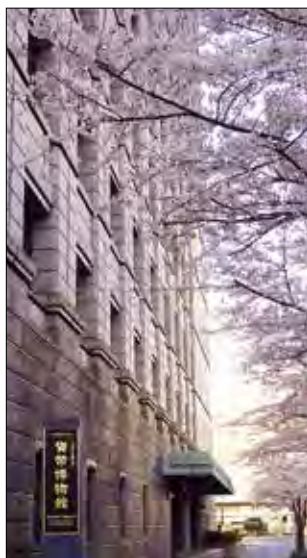
設立当初の日本銀行は、銀行券を発行せず、政府は発行過剰となっていた政府紙幣や国立銀行紙幣の回収に努めました。設立から3年後の1885(明治18)年、銀貨と紙幣の価格差がなくなったことから、日本銀行はじめて兌換銀行券を発行し、紙幣の発行を三元的に行うこととなりました。当時の銀行券は、銀貨との引換えが可能な「日本銀行兌換銀券」でした。

最初の日本銀行券は、百円券、十円券、五円券、一円券の4種類で、「お雇い外国人」であったイタリア人キヨッソーネによってデザインされた大黒が描かれています。

日本銀行券の発行が増えるにつれ、それまで流通していた政府紙幣や国立銀行紙幣の回収が進み、1899(明治32)年末には通用が停止されます。以降、紙幣は日本銀行券に統一されることとなり、中央銀行が三元的に銀行券を発行するしくみが整いました。

### おかね今昔物語

「使う」「貯める」…それだけではありません  
おかねは「昔」の暮らしのありよう  
それを「今」に伝える物語です



〈日本銀行金融研究所貨幣博物館〉

東京都中央区日本橋本石町 1-3-1  
<http://www.imes.boj.or.jp/cm/>